

「おい、道からはぐれたのじゃない？」

「ええ。」

「じゃあおりて、さがそうよ。」

「だめ。ここいらへおりれば、わたしの腰こしのとこまで雪の中へうまるんです。ほう、おっそろしいふきだまりだ。まっってください。ここんところをうまく通りぬけなけりや。ふいつ、歩け、アキセル。」

馬は、五、六分間ぐさりぐせりと雪だまりをくぐつてやつと、雪のあさいところへでました。ところが、そこは、雪の下が、かちかちのかたい道ではないらしく、下のほうが、でこぼこした木の根やいばらのかたまりなぞがあるような感じですよ。

「ほうつ。」と、ラルスは馬をとめて、そりからとびだしました。そして、みしりみしりと雪の中を歩いて道をさがしているようです。

わたしは、はんたいのがわへおりたちました。

「おいラルス、ここは森のはずれだね。」と、わたしは、そばに大きな木がずらりと立ちならんでいるのを感じてこういいいい、五、六歩前方へ歩きだしますと、きゆうに、ずぼりと、ひざ

の上まで雪の中へうまりこみました。

「おお、いけない。ふう。」とわたしは思わずこうさけんで、やっと足をひきぬいて、ひきかえしました。

「ラルス、とんでもないところへ来てしまったね。通りぬけられるかね、この雪の中が。」と、ひどく不安になって、こういいかけますとラルスは、

「はあい。」と、遠くのほうから、とんちんかな返事をして、ざくりざくりとかえってきました。

「道がわかりさえすれば、そっちへひきかえすんだけれど、わからないや、朝までここにじつとしてるんだね。あつは。」と、ラルスはわらいわらい手さきをふっています。

「おい、じょうだんじやないぜ。こんなところにまごまごしていれば、一時間もたたないうちにここへ死んでしまうぞ。」

わたしは、すこしむつとしてこういいました。もうからだは骨のまんなかまでひえきつています。それに風にびゅうびゅうたれどおしですから、そのつかれのために、なんだか眠ねむいような気持です。もしこのまま雪の上に寝ねたおれでもしようものなら、たちまちここへ死んでし